島津幸子さん

立命館大学文学部客員教授
神戸大学名誉教授　中川　正之

2017年3月14日の朝目をさますと、たいへん珍しいことなのだが、老妻が今日は何の日か知っているかと聞いてきた。寝ぼけた頭を懸命にスキャンしているとπ（パイ）の日だという最近インプットした情報が出てきた。「円周率のπの日」と応えると、老妻は結婚記念日だと言った。「それは知っている、πと同じように無限に続く」というようなことを私は言って、「無限」からの思い付きで、日本語学者の宮島達夫氏の受け売りではあるが、聖書の冒頭の「初めに言葉ありき」は、中国語では「初めに道ありき」で、ギリシャ語では「初めにロゴスありき」である。それを私流に言うと、「言葉（言う）系」と「論理系」に二分できるが、言語学はphilology（ロジックを愛する）と言い、中国語の「道」は論理系の「道理」と「言う」の意味を持つというように連続する一面があるなどなど言い続けた。老妻は、いいかげんな返事をしながら家事に戻った。その後も私は「真言密教」の「真言」の意味を調べたり、ピタゴラスの定理といったロゴスはビッグバーン以前にも真理であったのか否かなどなど迷走し時間を過ごした。島津幸子さんにはいつもこんな話を聞いてもらっていた。

島津幸子さんの訃報が入った日は、そのように基本的にはいつもと変わらぬ、しかし「無限に続く」ということにこだわった妄想の最中であった。

島津幸子さんと私は専門分野が同じだった。私は2018年3月に完全に教職を離れるので、島津さんが必要とする本を譲る約束をしていた。本の整理が出来たら、一度自宅まで来て見てもらう話までしていた。

島津さんの立命館着任は私より2年程後だったと記憶している。しかし、島津さんの着任以来、私は立命のことで分からないことがあれば島津さんに訊いた。私は左肩の腱板断裂の怪我をしており、しばらくコートの脱ぎ着も不自由な時期があった。袖を通すのに難渋していると、彼女はさり気なく手をかしてくれた。桜や紅葉を見ながら、私は何度か、来年も見られるかなと呟いたことがある。その都度、島津さんは「そんな（こと言わないでください）」と苦笑された。2016年3月、私が立命館の専任を任期満了で離れるまでには、私の島津さんへの依存は、立命館のこと以外にも広がった。しかしいつも、さり気なく、しかし的確に介助・介護・指摘をしていただいた。血圧が少し高めだということ以外、彼女の健康に問題はないと私は思いこんでいた。

立命館の教員公募の最終選考の段階で、島津さんがその中にいることを知った。私にとって島津さんは、名前は知っているが顔までは思いだせない程度の人だった。それから島津さんの論文を幾つか読んだ。いずれも難しい問題を真正面から捉えたまっすぐなもので好感が持てた。東京大学の木村英樹氏の推薦があったので、木村氏や東京大学の大学院で同じようなことをしている私の長女に島津さんの人となりを訊いた。長女は、島津さんと同じ授業を受けており、熟知の仲だった。その長女が「お父さんとうまくやれる数少ない人」と応えた。「数少ない」とは思わないが、「うまくやれた」と思う。島津さんが年長者におもねることに長けていた人だというのではない、とにかく何事にも穏やかでありながら的確なのである。

島津さんの早すぎる逝去を惜しむ声は多いが、ここでは少し長くなるが、日本中国語学会長の木津祐子氏の言葉（『日本中国語学会々報（2017年6月）』）を紹介しておきたい。

島津さんは穏やかな方で、いつもにこやかに話に耳を傾け、そして

迅速かつ誠実に仕事をやり遂げてくださいました。「それは私がしておきます」と短い言葉で軽やかに、仕事をどんどんこなしてくださる彼女は現事務局の支柱であったと言っても過言ではありません。昨年の別府の全国大会では、日程すべてが終了し、帰って行く皆さんを見送った後、連れ立って別府の公営浴場のはしごをしました。番台で買った石鹸が無くなったと大騒ぎする私に、島津さんは冷静にこれじゃないですかと、脱衣場の窓の桟に放置したままの小さな塊を指さして、何だか修学旅行のように二人で思わず吹き出したものです。その後、反省会と称し、大会の無事終了をお互いに労って大学のことや研究のこと、また家族のことなど様々におしゃべりしながら、別府の海の幸に舌鼓を打ったのでした。この学会の仕事が終わってからも、ずっと友人としてつきあっていきたい、そう思わせる方でした。

本事務局の会計業務はすべて島津さんが一手に引き受けてくださっていました。訃報に接し、残された事務局一同途方に暮れたのも事実です。しかしそれも束の間、紺野前幹事の的確なアドヴァイス、立命館大学で島津さんの同僚であった三須裕介会員の手厚いサポート、そして何よりも島津さんご遺族の献身的なご協力により、4月の中旬までには島津さんのお手元に保管されていた学会関連のファイル類と通帳・印鑑、そして下旬には、会計データをまとめてくださっていたUSBメモリーも学会事務局に届けられました。（中略）

島津さんが残された仕事に作業中のものは一つも無く、すべてきちんと整理され……

（後略）

島津さんは、大学卒業後しばらく企業で働かれ、その後大学院で中国語学の研究を始められた。回り道をしてこられたので木津さんが学会長で島津さんが幹事ということになったが、お二人はほぼ同世代であった

と思う。木津さんの文章からも島津さんは、相手がいかなる人であっても、誠実・控え目でかつ的確に物事をこなす人であったことが分かる。

今でも非常勤として週に一度立命館に来て島津さんの研究室があった尚学館の前を通る。その度に彼女の不在を強く感じる。あまりに寂しくて、島津さんとは姉妹のように仲がよかった（島津さんには「あなたの悪友」とからかっていた）長澤麻子さんの研究室を訪ね、尽きぬ思い出を語り合うことがある。そこで初めて、島津さんが私の専任の期限終了までサバティカルを取られなかったことを知った。長澤さんも「知らなかったの？」と驚いた。私が専任でいる間は中川の介護をしようと思っておられたのだろう。そのことを言わぬところがいかにも島津幸子さんらしいと思う。

島津幸子さん、ほんとうにお世話になりました。ありがとうございました。